

---

# 銀レウス番外編 あるハンターとの狩猟記録

夜桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀レウス番外編 あるハンターとの狩猟記録

### 【Nコード】

N6977T

### 【作者名】

夜桜

### 【あらすじ】

ゼロ・クラフトさん著作・モンスターハンター2ndGの蒼穹の覇者としてのコラボレーション企画です。

## 銀翼と蒼穹の邂逅（前書き）

この度、ゼロ・クラフトさんとめでたくコラボすることになった夜桜です。

本来なら本編に組み込む筈でしたが諸々の事情により番外編という形で記載することになりました。

そして今回のコラボにあたる簡単な補足ですが私とゼロさんとは当然、描写内容に大きな違いがありますので展開上、矛盾してる場面もあります。が仕様ということで納得して頂けたら幸いです。

次に狩猟について。ゼロさんは弟子たちの狩猟シーンを、私は師匠たちの狩猟シーンを担当することになりますので次回からは全く違う物語展開が繰り広げられるので二度美味しい！……と、ちょっと自信なさげに押してみます。

と言うわけで本編をどうぞ！

## 銀翼と蒼穹の邂逅

大陸中のハンターが集まり、武器・防具の製造技術が群を抜いて高いとされるハンターと鍛冶師の聖地・ドンドルマ。

そのドンドルマのほぼ中央にあるハンターズギルドはかつてないほどに緊迫した空気が張り詰めていたが、その光景はあまりに異様だった。

ギルドの酒場では昼夜を問わず人の熱気とアルコールと煙草の臭い、喜怒哀楽が混じり合った喧噪が絶えない場所だが、今日に限ってはその喧噪はなく、半分のハンターは並々ならぬ威圧感から逃げるように食事に集中して、残り半分は怖い物見たさで、しかし巻き沿いは喰らわないように観察してる。

「ねえ、アンタ達もう少し仲良くしようとか思わないの？」

「するも何も、この男とは初対面だ」

「いきなり威圧飛ばしてきた相手に握手しろと？」

ゴゴゴゴゴゴ……と、背後にそんな効果音が付きそうなオーラをまき散らし、席に着いて表情を変えずに、決して相手から目を離さず出された料理をつまむ。

一触即発。まさにそんな空気ではあるが一応、ハンターとしてのルールは守ってるらしく、互いに得物に手を伸ばしたりはしてない。何が引き金でキレるか分からないけれど。

「……あのお、取り敢えず自己紹介でもしましょうか？ 折角、

その……同じ席に着いたワケですから」

「そうね……。バカ二人はほっときましょ」

少年の言葉に同意するようにスコール側の席に着いていた少女が口を開く。彼の豹変振りには驚かされたが、今は全力でこの場を和ませるのが最優先だ。主に隣に座っている少女の為に。

「私はヘヴィボウガン使いのジェガン。ブルグ村を拠点してるハンターよ。で、さっきから私の服にしがみついている娘はライトボウガ

ン使いのリーシャよ」

「……よ、よろしく……」

少しだけ顔を向けると、すぐに目を逸らす。ジェガンはそつと溜め息を吐くが、同時に仕方ないとも思った。何しろリーシャが気持ちとしては絶対に認めたくはないが、絶対的に信頼している、あの優男が近寄りがたい雰囲気で座っているのだ。素直に自分にしがみついてくれたのは嬉しかったが、頭を撫でようが優しい言葉を掛けようが少しも変化ない辺り、所詮はスコールの代わりかと内心で毒づく。

「僕は片手剣使いのルカーチ・ローズ。カーチと呼んでください。僕も皆さんと同じハンターをやっている……て、言えるほど立派じゃないかもしれませんけど、いずれは師匠のようなハンターになるべく修行する毎日です」

「……頑張つて……」

「うん。ありがとう、リーシャ」

「……」

「むう……」

チクチクと、カーチに隣から発せられる威圧とは別のモノが突き刺さる。

カーチの隣に座る少女は頬を膨らませて、ジェガンと名乗った少女は半目で睨んでいた。

「カーチ様、小さい方がいいんですか？」

「リーシャに手え出したら……殺すわよ？」

「ええ！？ どうしてそうなるの？！」

向かい側と隣に座るハンターから異なる感情を剥き出しのままぶつけられて尻込みをするカーチ。

嫉妬。警告。殺意。しかも内一人は師事を受けてる師匠と同等のG級ハンターだ。自分などランゴスタも同然の存在でしかない。

「じゃあ次は私からね。私はステイナ・ローズ。カーチの姉で元ハンター。今は故郷の村にある酒場で働いてるしがないウェイター

よ。……ていうかスコール、アンタ性格変わり過ぎよ」

「？俺と貴女は初対面の筈だが……？」

「自分が有名人だつてこと、自覚してる？」

システイナに指摘されて『ああ……』と、短く呟いて納得する。

面識がないとは言え、彼女は元・受付嬢だ。ギルドの酒場で働く人間というのは自然とハンターの顔と名前を覚えるものだ。しかもスコールは最短期間に加えて最年少でG級となったハンターだ。ハンターや世間の風評はともかく、ドンドルマ暮らしがそれなりに長い人間なら必ず一度は耳にしたことのある名前だ。

「俺もお前のことは知ってたが……まさか簡単に女に手出すような人間だとは思わなかったがな」

「紳士的な態度で声を掛けたつもりだったんだが、あまりに狭量な心だと“蒼穹の覇者”の名が泣くぞ」

「何を」

「ハイそこ喧嘩しない！」

『……………』

システイナに一喝されて、黙り込む。一応、互いに良識は持ち合わせているようだがいかんせん初対面の印象が悪かった。スコールからすればただの挨拶程度にしか思っていないようだ。

そんな調子で残りのメンバー　リン・ホウランとリーシャ

の自己紹介は終わり、スコールとカーチの師匠ことランハ以外は概ね良好な関係を築いていた。

……そもそも何故、この二人がこんなに険悪なのか、事の発端はスコールにある。

経験を積ませる為にと、わざわざドンドルマまでやってきたスコール一同は偶然、ランハの元で修行中のカーチとリンを目撃。気になる娘が居れば取り敢えず声を掛けつつも紳士的な態度を忘れないスコールが、リンを見つけて声を掛けるのはあまりに必然だったと言える。

知らない男に声を掛けられては、内気で引っ込み思案なリンが困

るのは自分が一番分かってるつもりだ。だからカーチは男として身を挺してリンを護り、知らずに好感度を上げたのはまた別の話。

恋人……というような関係ではないが、それでもそれに近い間柄である相手がいる手前、スコールは大人しく引き下がりすぐに目的の依頼書を見つけて手を伸ばしたところで、同じ依頼書を手に取るうとしたランハと重なった。

……それ自体は何の問題もなかった。ただ、ランハという人間は何処か他人を威圧するオーラをまき散らしているせいで、必然的にスコールを臨戦態勢にさせてしまった。

結果、二人は無言で依頼書を掴んだまま睨み合い、依頼書を取るうとするハンターたちを遠ざけ、冒頭の展開に至る。

（ていうかコイツ、こんなに好戦的だっけ？）

マンゴージューズを一気飲みしながらジェガンは率直な感想を抱いた。人畜無害、とまではいかないが彼は基本的に人当たりがいいしよっちゅう村の女の子に声を掛けてるが、ジェガンに言わせればその程度だ。口が裂けても言いたくないが、総合評価で言えばスコールはいい奴だ。間違っても強引な誘い方はしないし、女の子と話すと言っても世間話だったり悪ふざけだったり普通に食事を楽しんだりする、極めて普通の付き合いだ。だからこそ、彼の豹変ぶりには驚かされた。

とは言え、このままでは折角ドンドルマに来たというのに無駄な時間を浪費してしまう。何か手はないかと思案していたら、斜向かいに座っていたシステイナが声を上げる。

「あーもうメンドーねアンタたち！ それならいつそ互いの弟子たちだけ狩り場に放り込んだらどうなの？！」

「何だと？」「むっ？」

ランハとスコールの声が同時に重なり、次いで少し難しい顔を浮かべた。

と言うのも、今回二人が選んだのは最近沼地に現れたというフルフルの討伐。飛竜種の中では比較的鈍足だが、それを補うだけの攻

撃力がある。逃げに徹すれば、例えハンターでなくとも生存することとは容易ではあるが、それが討伐となると

「システイナ、それは本気か？」

確認の意味を込めて、ランハが尋ねる。

初心者とは言え、四人掛かりで討伐に挑めば或いは達成可能な依頼だろう。

だが問題は構成にある。

片手剣のカーチ。ライトボウガンのリーシャとリン。ヘヴィボウガンのジェガン。火力に不足はないが、一度瓦解すれば持ち直しはほぼ不可能な組み合わせだ。それはスコールも同意見らしく、苦虫を噛んだような顔を浮かべている。

「だってそうじゃない。アンタ達の弟子はいずれもイャンクックを倒せるぐらいの実力者なんでしょ？ その程度のハンターが四人も集まればフルフルぐらいどうってことないし、フルフル相手なら逃げるのは簡単じゃない」

「確かにそうだが……」

システイナの言い分は分かる。だがそれでもスコールは首を縦に振れない。

この四人で唯一、飛竜種との戦闘経験があるのはジェガン。だがその彼女は防御よりも攻撃に重点を置いた戦闘を好む。スコールのアドバイスを受けてヘヴィボウガンにシールドを付けるぐらいの対策はしているようだが、だからと言って攻めの姿勢が変わった訳じゃない。

加えて言うならば、フルフルは一撃が重い。イャンクックより鈍足で動きも緩慢としたモンスターだが、そうした敵は大抵、機動力を補うだけの攻撃力、もしくは防御力を備えてる。フルフルの場合は前者に該当する。

「まさかとは思っけど、依頼を取り下げようなんて考えてないでしょうね」

頭を抱えるスコールの苦悩を見透かしたかのようにジェガンが割



り込んで来た。

「今回の目的は集団狩猟のノウハウの修得でしょ？ それに私は一度フルフル亜種と戦って、痛い目見てるから無茶なんてしないわよ……それとも、アンタの中で私たちはまだ守らなきゃいけない子供なワケ？」

「……………」

彼女の非難を受けて黙考する。

確かに今回、遠路はるばるドンドルマに来たのはそれが目的だ。ハンターというハイリスク・ハイリターンの世界で食っていくからにはブルグ村だけで食いつなぐのは難しい。将来的なことを考えればここでの経験は絶対に活きてくる。

十数秒ほど、沈黙が続き、やがて何かを決断したかのようにスコールは口を開く。

「あまり無茶するなよ。一応、お前が最年長になるんだから」

「それでは師匠、行ってきます」

「ああ、行つて来い」

こうして、各々の弟子たちは竜車に乗り込んで己の師匠に別れを告げて沼地へと向かっていった。カーチとリンは互いの手を繋いだ状態で別れを告げ、ジェガンが御者を勤め、リーシャが別れを惜しむようにスコールに抱きついて……ジェガンに引き剥がされてようやく狩り場へと向かっていく。

「で、アンタたちはこれからどうするつもり？」

「……………」

いつの間にか後ろに来ていたシステイナの言い分に首を傾げるも、彼女は気にせず続ける。

「まさか、あの子たちが帰ってくるまで飲んで食べて寝る気じゃないでしょうね？」

「システイナ、何が言いたい」

ランハの言葉を受け、含み笑いを浮かべて一枚の羊皮紙を突き付

ける。

下位・上位クエストのボードに貼られている屑紙とは違う、重要性が高く、個人で称号を持つような凄腕ハンターでなければ閲覧すら許されない依頼 即ちG級クエストの依頼だ。

不審に思いながら依頼書を乱暴に手から奪い、目を通した瞬間、いつも無愛想なランハの表情が険しくなった。

「グラビモス亜種だと？」

「ええ。ほんの数分前に入った観測手からの情報によれば現在は移動中。だけどこのまま行けば確実にあの子たちの狩り場に到達する。そしてここには今、蒼穹の覇者と……無名の凄腕ハンターが居る」  
「今の間が少し気になるけど……確かにまたとない人材だろうな」  
ゆっくりと息を吐きながら、改めて相手の顔を見る。

蒼乱覇。

過去の狩猟でパートナーを失ったハンター。以降、取り憑かれたように雪山へ足を運んではレーザーやティガレックスを始め、あらゆるモンスターを駆逐してきた。

独特の刀を振るうその姿が真っ白なキャンパスを赤い線で、斑点で彩り、最後に二つの足で立っているのは蒼を纏ったハンター。

故に付いた二つ名は蒼穹の覇者。それは過酷な銀世界で行われる生存競争に打ち克った勝者のみが、青よりも蒼い空を仰ぐことを許される強者の特権。

（そんなに良いものかねえ、称号つてのは）

対して、同じG級ハンターのスコールは実績・知名度に反してランハのような通り名が存在しない。（好き勝手に呼ばれてる名前ならいくつかあるが残念ながら彼はそんなことなど知らない）

存在しないが、だからと言って彼の実力を過小評価するようなハンターはこのドンドルマにはいない。

史上最年少でG級ハンターとなった天才。

あらゆる武器を使いこなす凄腕ハンター。

別にハンターが多くの武器を使いこなすのは問題ではない。が、

昨今では一つの武器を徹底的に使い込み、それを極めることを美德とする考えを持つ人間が多く、それを邪道と揶揄する者は多い。ともすれば、麻雀でゴミ手での上がりを優先し、高い手牌での上がりを阻止するスタイルとも言える。

現実的な効率よりも、機能美を備えた効率こそハンターのあるべき姿。

そうした価値観がハンター全体に広がっていればなるほど、頻繁に武器を変える彼の戦法は受け入れがたいものがある。スコール辺りに言わせれば武器を変えるのは気分の問題で、本命は大剣だと言っているけれど。

「……ま、最近あいつ等に合わせて下位クエストばつか受注してたし、たまには悪くないな」

「俺は別に構わないぞ。……足さえ引つ張らなければ」

「ただの太刀房でなきゃ俺はいいぞ」

「……ねえ、アンタたちどうやってたら初対面の相手にそこまで仲悪く居られるの？」

システイナの尤もな言葉は、しかし二人の耳に届くことはなかった。

本当にこの二人で大丈夫かしら？

今更ながらの人選に、彼女はひたすら不安を覚えるのだった。

## 銀翼と蒼穹の邂逅（後書き）

次回からは師匠たちのバトルがメインになります。

私自身、高校時代に合作小説をやったことがあったのですがそれはまた違った楽しみ方が出来て楽しみながら執筆できました。……因みに当時、合作でお世話になった人は数年前から絶賛音信不通です。マジで心配してます；；

次の更新がいつになるか分かりませんが少しでも銀レウスと蒼穹の覇者を知ってくれる人が増えて頂けたら嬉しい限りです。

でわでわ。

## 嵐の前の静けさ（前書き）

前回、弟子サイドは書かないと言ってた私ですが御免なさい。私の方でも弟子サイドを書くことになっていたので何か勘違いをしてしました。本当にお世話が瀬して済みません。

## 嵐の前の静けさ

G級クエストはその殆どが緊急を要する依頼である場合が多い  
その為、G級クエストで依頼されたモンスターが居る地へハンターを運搬するのは通常のクエストで使われる竜車ではなく、飼いやらしたリオレウスの背に乗せて運ばれる。

聞けばなるほど、確かに早く狩り場に到着して優遇されると思うだろう。しかしこの運搬法にも欠点はある。

まず、降ろされる場所が毎回異なる。何もない場所に降ろされることもあればモンスターのど真ん中、或いは本命の正面に降ろされる場合もある。

他にも支給品が届くのに時間が掛かったりするが、こちらは気にするほど問題じゃない。元々G級ハンターともなれば必要な道具は全て自分で持ち込むもの。支給品のお世話になるのはもっぱら下位クラスで明日の英雄を夢見るハンターたちだ。

「まあ、この手の依頼で不足の事態ってのは付き物だが……」

ゆつくりと、背中に背負ったブリュンヒルデを構えて油断なく周囲を見渡す。

赤い群れ。

猛禽類を思わせる獰猛な瞳。

統率の取れた陣形。

上空からそれっぽいものが見えた時点でお互い『まさか……』とは予想してはいたが

「イーオスの群れに落とすことないだろ、あの御者」

鬱陶しそうに鞘から刀を抜き、その存在感をアピールする。単独で使うには攻撃力・攻撃範囲に優れた武器ではあるが、パーティを組む上では嫌煙されがちな武器だ。

「ま、肩慣らしには丁度いい」

「俺には物足りないくらいだな」

「まあ、そうだろうな」

適当に返答しながら片手でブリュンヒルデを持ち上げると、叩き付けるように振り下ろした。至近距離で大タル爆弾が爆発したかのように周囲に泥が四散してイーオスたちの視界を塞ぐ。

髪や顔を泥で汚しながらスコールは駆けた。連日の雨でぬかるんで足を取られやすい環境であるのに、重装備でガチガチに身体と腕を固めているにも関わらず、風のような身軽さで駆け抜ける。

突然の炸裂に動揺したイーオスの真横に付く。そのまま強引にブリュンヒルデを薙ぎ払う。圧倒的な塊である筈の刃が太刀のような速さで肉を断ち切り、背中の骨を砕き、半分以上を切断した状態で身体に食い込み、そのまま隣に居たイーオスを一緒に巻き込んで空へ吹き飛ばし、ランハを一瞥する。

「俺が肩慣らしを終えた頃にはこいつ等は駆逐されてるだろうし、お前には少なすぎるだろう」

└

馬車の衝突事故を彷彿とさせる奇襲に感化されてか、或いは獣の本能に従ってか。三匹のイーオスが連携を組んでランハに急接近する。

あるイーオスは飛びかかって頭上から強襲を仕掛けて

あるイーオスは真つ直ぐ最短距離を走りながら

あるイーオスはサイドからフックの軌道を描くように近づいて

三者三様の攻撃は、しかしランハが軽く身動ぎするだけで失敗に終わった。

『ッ!?!』

いや、軽く………どここの次元ではない。瞬きするかしないかの一瞬の時間に三匹のイーオスと交差するのを見越した瞬間、彼の周りに三条の閃光が走り、鐸鳴り音が響く。

三匹のイーオスは地にひれ伏した。

より正確に言えば、首から上を綺麗に切断された状態で……。

「必要最低限の動きだけで始末するのがプロだ。お前のやり方には無駄が多い」

「攻略法なんて戦う人間、武器、状況によってその都度変わるものだ。ついでに言うなら俺は他人と競うほど暇人じゃない」

互いに皮肉を叩きながら、二人は目の前のモンスターを殲滅すべく駆け出した。

竜車に身を任せながらライトボウガンの手入れをするリーシャの心境は不安半分、期待半分で覆われていた。

始めてのモンスター。

慣れないチーム。

そして 歳の近い異性。

ブルグ村に居たときはスコールとジェガン以外のハンターと組んだことがなかった。元々、地方を主軸に活躍するハンターというのはドンドルマのハンターと違い、決まった人間とチームを組む傾向がある。

スコールは言った。これから先、ハンターとして成長するのなら今のうちに多くのハンターと出来るだけ組んで、色んな経験を自分の中に蓄積しておけばそれは何よりの財産となると。ジェガンに言わせれば万年ソロだったハンターが言っても説得力の欠片もないが、誰よりもスコールを信じてるリーシャにとって、彼の言葉は全てだ。  
(がんばらないと……)

むんつと、紅葉のような小さな手でこつそり握り拳を作ってから道具の確認をする。

急遽、ハンターストアで用意した通常弾と散弾と調合素材。元々三人で狩りに出掛ける予定だったので調合素材まで買う必要はなかったが、このメンバーは自分を含めて地力が足りない。だから弾は多いに越したことはない。それからスコールに影響されて用意するようになった投げナイフ。今回はフルフルが相手だから現地で毒テングダケを採取して、そのエキスを使って毒ナイフを作れば、よ



りスムーズに狩りができる。

「珍しいもの、使っただね」

「……………」

ふと、投げナイフを磨いているとカーチが話しかけてきた。珍しいとは、一体何のことを言っているのだろうか？

「僕はそれ、支給品に入っているときしか使ったことないけど、リーシャはよく使うの？」

「……………うん……………。スコール、よく使うから……………」

少し緊張気味に答えたが、自分で思ってたよりもハッキリ受け答えができたことリーシャは驚いた。多分、目の前の少年がリーシャの知る男と、あまりにもかけ離れた存在だからだろう。

……………暗に彼が女っぽく見えると言われている気もするが、彼女に悪気はない。

「……………」

会話が途切れてしまい、気まずいと感じてしまう。元々リーシャは自分から話を振るということが殆どない。それを思うとスコールとジェガンは知らない相手に普通に会話したり途切れることなく話が続くのが不思議で仕方ない。

自分から何か話さなければ　そんな使命感に駆られたリーシャは一生懸命に考えて、考えて……………ふと、スコールが異性と話をするときによく使う常套手段を思い出した。

「力、カーチは……………」

「うん」

「好きなひと、いる？」

「な……………っ!？」

斜め上どころか上空からの爆撃にも等しいトンデモ発言に思わずたじろぐカーチと、それに反応して思わずライトボウガンを落とすリンと、『あのバカ……………リーシャに変な教育して……………』と、悪態を隠さず舌打ちしながら手綱を握る手に力を込めるジェガン。

「好きなひと、いるの？」

「うつ……」

裏も何もない、無垢な瞳が真っ直ぐに自分を見つめてくる。リンとはまた違った可愛さにたじろぎ助けを求めようとリンを見る。

……何故か彼の前には、リーシャと同じようにじい〜っとこちらを見つめるリンの姿があつた

「カーチ様……心に決めた人がいるんですか？」

「そ、そんな人まだ居ないよっ！　そういうの分らないけど、大切な人だったら……」

ゴニョゴニョと、口ごもるカーチになおも食い下がる野次馬と、一人怒りのオーラを纏う御者役。

……とてもこれからモンスターを狩る雰囲気とは言えないまま、一路はフルフルが待つ沼地を目指す。

結局、好戦的なイーオスを文字通り排除してからのグラビモス亜種探しとなった。

モンスターを探索する際は事前情報を頼りに、或いはその個体の習性を把握して通り道となるエリアに目星を付けてそこを順次回るか、自動マーキングと呼ばれるスキルを駆使するかのどちらかになる。

二人の場合は前者に該当するが、今回のグラビモス亜種に関しての探索は難航することはあまりない。というのも、大型モンスターの中でも一際大きなモンスターであるため、エリアを跨いでもその巨体を遠くから目視することが可能なのだ。

「黒グラは隣のエリアで迎え撃つぞ」

広く空けた場所に出て、ランハはスコールに言った。

「熱線で草が燃えたときに逃げ場がなくなるから、か。確かにここから燃える物もないし、火災によって周囲の酸素が奪われる、なんて事態はゴメンだ」

「それについては俺も同感だ。……けど俺ら、もうあいつに目付けられてるぞ」

ブリュンヒルデに手を伸ばし、前方から放たれる野性味溢れる怒りを受けながら正面を睨む。

行く手を遮るようには、重量感たっぷりの足音を立てながら迫る黒い塊。

幾人もの剣士たちを苦しめ、或いは屠ってきた要塞ながらの鉄壁を誇る飛竜・グラビモスの亜種 通称・黒グラ。

その存在が、目と鼻の先まで迫ってきた。

二人はすぐに散開する。鈍重な相手とは言え、巨大モンスターの前で一カ所に固まらず、ばらけて戦うのは初歩の初歩だ。だが今回はグラビモス亜種の方が上手だった。

（熱線……ッ！）

腹部に力を入れて、溜めモーションに入るのを確認した途端、冷や汗が流れた。そのグラビモス亜種は気が高ぶっているせいか、既に怒り状態だ。そこから吐き出される熱線の威力など、想像したくない。

『！』

口から灼熱の熱線が吐き出され、腰の高さほどの草木を一瞬にして焼き払い、背後にあった崖を崩して退路を塞ぐ。これでこのエリアから脱出する術は正面からの入り口のみだが、グラビモス亜種の目が静かに語っていた。

下手な小細工を打てば痛い目を見るぞと。

更に悪いことに、熱線の余波を受けた草に火が付き、メラメラと燃え始める始末。

「大ピンチ……てやつか」

あくまで冷静さを保ったまま、呟く。

「スコール、俺が活路を開くから手伝え」

「太刀じゃ相性が悪いだろ。俺が前衛になるからお前は尻尾でも狙ってろ」

「その言葉、そっくりそのまま返そう……と、言いたいところだがこ

のままじゃ平行線だぞ。どうする気だ？」

「決まってる」

ブリュンヒルデをバツドのように構えてから、両手持ちに切り替える。やるべきことなんて、昔から一つしかない。

「俺はお前より早くアイツを倒そうと動く。そしてお前は俺より早くアイツを倒そうとする。それで利害は一致する筈だ」

「なるほど、そいつは名案だ。それなら俺はお前に真の太刀使いというものを見せてやろう」

互いに皮肉を言い合いながら、二人は黒い暴君へ駆け出した。

## 嵐の前の静けさ（後書き）

師匠たちのバトルがメインと言った結果がこれだよ！  
次回こそは……次回こそは……ッ！

## 黒は猛者と踊り、白は戯れる（前書き）

前回から時間が空きましたが合作が完成しました。

ゼロさんのところはフルフルメインですが私の方では両方の狩猟シーンを描きました。キャッチフレーズっぽく言うならボリューム二倍と言ったところでしょうか？ そして作業も二倍という罫。orz  
……モンハンやって逃避しよ。（殴）

## 黒は猛者と踊り、白は戯れる

師匠たちが殺伐とした狩り場で戦闘を行っている頃、弟子たちはベースキャンプで食事を取っていた。食事と言っても狩りが始まればガンナーと言えども激しく動き回る必要が出てくるので小腹を満たす程度の食事だ。

勿論、ベースキャンプでやることは食事以外にもある。

「フルフルは恐らくこの洞窟エリアに居るわ」

木箱の上に広げた地図を指さしてジェガンは言った。この四人の中で亜種とは言え、フルフルとの戦闘経験があるのは彼女だけだ。

「戦った印象としてはあいつは鈍足を補うように攻撃力があるわ。それと目が退化してるから閃光玉は効かない。しかもその嗅覚だけで獲物の位置を正確に把握してくるからこのハンデはないものだと思うって」

ジェガンの言葉に三人がこくりと頷く。

「次に攻撃についてだけど、今回は安全性を最優先して火力は私たちガンナーで、カーチには囷を引き受けてもらう」

「出来るだけ相手の注意を惹き付けばいいんですね」

確認するように尋ねたカーチの言葉を、ジェガンは無言で首を振って否定する。

「そこまで高望みしちゃいないわ。囷役と言っても基本的には生存重視。攻撃を加えるときはフルフルが電撃プレスを吐いた直後のみ。その装備じゃ一撃でも食らえば致命傷よ」

ジェガンの脳裏に雪山での苦い思い出が過ぎる。あのときの自分は無謀な攻めで押し切ろうとしたあまり、痛い目を見ただけでなくスコールの足を引っ張ってしまった。

初見だから仕方ないと言えばそれまでかも知れないが、ジェガンには今でもあの時のミスが打ち付けられた楔のように脳裏に焼き付いて離れない。

故に今回こそは、絶対にあんな事態を招いてはいけない。自分は今、このチームのリーダーなのだから。

「まずは私がペイント弾を撃って注意を向けるわ。その間、リーシヤ、カーチ、リンは相手の動きをよく見て。あいつの攻撃パターンもちゃんと教えるけど、知識で得るのと実戦で覚えるのじゃ大分勝手が違うから」

「ジェガン……」

「大丈夫よりーシヤ。今回はシールド付けてあるから万一のときでも最悪、致命傷は避けられるし無茶なんて絶対しないわ」

「でも、スコール言ってた……。ジェガンの面倒、ちゃんと見ろって……」

「アタシは保護者付きのガキかぁー!？」

自分が面倒見られる側の人間にされたことに腹を立てる。取り敢えず帰ってきたら散弾ぶつ放して蜂の巣にしてやろうと心に決める。だが今はフルフルの対策を練るのが先だと自分に言い聞かせて、平静を取り戻す。

「と、とにかく……今からフルフルの攻撃パターンと注意点話すからちゃんと記憶しなさいッ。いいわね!？」

『は、はい……』

妙な気迫に気圧されるように、三人は頷いた。

草木の焼け焦げた臭いが鼻を突く。焦土と化した大地を駆ける度に二つの異なる風が巻き起こり、赤い暴風と黒い巨鎧が暴れ狂う。

相手は恐ろしく頑丈な敵だ。剣士泣かせの防御力にデタラメな攻撃力。それはまさに難攻不落の要塞を相手にするが如き苦戦。本来ならこの手の敵は痺れ罨などで足止めして胸部破壊を最優先とするのだが

「……!」

咆吼と共に体重を乗せた突進で小さな獲物を轢き殺そうとする。避けられない攻撃じゃないが、結果的に腹は地面に接するので手が



出せない。下手に攻撃を加えれば悪戯に切れ味を消耗するだけなく、弾かれて体勢を崩してしまう。

予感には既に確信へと変わった。この黒グラは明らかにハンターと戦い慣れしている。どれ程のハンターを屠ったのか、それは俺たちの知るべきことではないが、それに見合うだけの知恵は身に付けてる。

胸部はなるべく晒さない。後ろに回り込んだ敵は尻尾で薙ぎ払い、熱線はこちらの動きをある程度予測して撃ってくる。

一つ一つの動作は決して速くはない。それでも俺たちはチャンスを作ることが出来ずに攻めあぐねていた。

「！」

前触れもなく、黒グラが羽ばたき、跳躍する。その行動が意味するのは一つしかない……ッ！

（ボディプレス……ッ！）

冷や汗が一気に干上がり、別の汗が一瞬で吹き出た。

避けるというよりも逃げるように範囲から逃れようとするが間に合わなかった。直後に発生した地震でバランスを崩し、風圧で不安定な姿勢のまま吹き飛ばされて逆さまのまま大木に激突する。

ランハはどうなったか目を配らせてみる。どうやら辛うじて地震と風圧の被害は免れ、黒グラへ接敵しようと試みてる。

だがそれは徒労に終わる。直後に腹から催眠ガスを噴出したせいで進行方向を変更せざるを得なくなったからだ。

……うん。何というか、これはね

（下らない意地張ってる場合じゃねーよな、どう考えても……）

互いの落ち度は言うまでもなく連携を拒んだこと。ソロでも時間さえ掛ければ倒すことは可能だ。これは断言してもいい。だが今回は時間を掛けられない理由がある。

この沼地は下位狩り場に認定されてる別の沼地が隣接してる。そしてそこには互いの弟子たちが居る。時間を掛けて討伐しようとするれば狩り場を変更され、最悪弟子たちと鉢合わせになることも充分

考えられる。

決断さえすれば、後の行動は早い。黒グラの視界から外れるように迂回しつつ、尻尾に注意して、ランハと合流して叫ぶように声を上げる。

「ランハ、一時休戦だ！ この黒グラ、ハンター慣れしてるぞ！」

返事を待つ余裕なんてない。すぐに尻尾が振るわれたからだ。足腰に力を入れて、棒高跳びのように跳んで攻撃を回避して空中で綺麗に身体を捻って着地。直後に疾走する。こいつの攻撃は決して速くない。スピードで勝っているならそれを使わない手はない。

「停戦と言うがな、こいつの胸部を破壊するのは骨が折れるぞ？」

「尻尾なら問題はないだろう。あれだけ左右に振れるってことは人間で言う関節部なら刃は通りやすいし弾かれる心配もない」

「さらに難しいことを言ってくれる……」

そう答えるランハだったが、その不服の色は何えない。その顔色には覚えがある。

ハンター稼業を長らく続けていると、ある特殊な感情を抱くようになる場合がある。それは俺にも共通して言えることだが、どうやらランハは狩りで求められるモノが高ければ高いほど、高揚感が増すタイプの人間みたいだ。

「尻尾はいいとして、お前はどうかんだ？ 爆弾もなしにあの胸部を破壊できるとでも？」

「俺を並みの大剣使いと同列にするなよ、蒼穹の覇者」

伊達にこちらら古龍であつてもソロでやってきたんだ。頼れる相棒は大剣と培ってきた経験と力だけでのし上がってきたんだ。この程度のピンチ、切り抜けられないで何がG級ハンターだ……ッ！

「お前が尻尾を切断する前に胸部破壊を済ませてトドメを刺すしよう」

「その台詞、そっくりそのまま返してやるよ」

互いに皮肉を言いながら、俺たちは同時に駆け出した。

フルフルの発見は思ってたよりも難しくはなかった。元々行動範囲が狭い飛竜種であることに加えて、本能的に暗い所を好む習性がある。つまり、沼地では比較的振り回されることなく発見しやすいモンスターなのだ。

よって、探索を始めて五分と経たないうちに洞窟内は戦場と化した。

「来るわよ、散開！」

ジェガンの鋭い声に弾かれるように、扇状に展開する。取り囲むように展開しないのは不足の事態が起きたとき、すぐに近くにいる誰かが対応できるようにする為だ。

まずは景気づけに……と言わんばかりにカーチが一番槍となって右翼側から斬り込む。いつもは手が痺れるような感触が返ってくるが、今回はまるで違う。まるで粘土のように刃は食い込んでいくものの、それを押し返そうと筋肉が反発してくる。今まで味わったことのない未知の感覚に戸惑いを見せつつもカーチは手を緩めない。この違和感は剣士ならば誰もが通る道だと自分に言い聞かせながら刃を切り返す。（因みに二人のG級ハンターは違和感なんて感じる間もなくぶった切ってしまうが彼がそれを知るのはもう少し先の話）

「カーチ様、帯電です！」

カーチの近くにいたリンが警告を飛ばす。カーチはそれに従い飛び退く。直後、フルフルは青い電気を身体中から放電する。その間にリーシャは距離を詰め、Lv2散弾を一発だけ撃ち込み、すぐに離脱してLv2通常弾に切り替える。その間にジェガンはカーチの反対側から本体を、リンはカーチの近くでLv1貫通弾を足へ撃ち込む。こと精密射撃に関して言えばこのメンバー内では彼女の右に出るものはいない。故に今回、リンの役目は転倒。いわば主力の補佐だ。

「ーッ！」

弾丸と刃が己の身体を痛み付ける中で、フルフルは果敢にも体当たりを仕掛けてきた。狙いは尤も小柄で防御力のないリーシャ。カ

イチとリンは何かダメージ蓄積による怯みで攻撃を阻止しようと試みるも、それも虚しくフルフルはその巨体をスピードに乗せて、襲いかかってきた。

「リーシャ！」

思わず、彼女の名前を呼ぶカーチ。だが白い重圧が迫ってきているにも関わらず、リーシャは逃げるどころか前へ踏み込んだ。常識を逸脱した、回避とは呼べない自殺行為。だが次の瞬間、フルフルと地面との間にある僅かな隙間からリーシャはボウガンと一緒に抜けてきた。

「――！」

いや、抜けただけではない。振り抜き際に現地で調合して作った毒投げナイフを四本まとめて投擲して、毒状態にするという手痛いしっぺ返しまでしてのけた。

リーシャにはリンのような点を射抜くのような射撃はできない。

せいぜい、急所を中心とした円に向かって攻撃を当てる程度。

だがリーシャにもまた、先天的な才能がある。それはモンスターの動きをより立体的に捉え、無意識に行動を予測すること。それは次の行動を予測するだけでなく、重心を見抜いたり、先のように攻撃の穴を見ついたりすることに特化した観察眼。ましてやリーシャはハンターとしては元より、女性の中でも小柄な部類に入る。隙間を抜けて背後を取ることなど朝飯前だ。

「全く……。相変わらず心臓に悪いことするわね……」

溜め息を吐きつつも、その顔には少しの不安もなかった。最初の方こそ見る度に心臓が口から出るほどに緊張していたが、今ではもはや見慣れた光景だ。

（僕も負けてられない……ッ！）

曲芸的な動きを見せつけられた所為か、カーチの闘争心に火が点く。勿論、真剣勝負の場である以上優劣を決める考えなどこれっぽちもない。強いて言うなら彼もまた、男だからと言うべきか。

手痛い仕打ちを受けたフルフルはそのまま電撃ブレスを吐き出す

為に口へ溜める。それを見てカーチは一気に駆け出し、ジェガンは怒声をあげて引き留めようとする。

ジェガンの静止を振り切るように電撃ブレスは吐き出された。このまま行けばカーチの身体は焼け焦げてしまうのは必定。だがカーチは直進しながら攻撃のラインの外側へ抜けて、回避と同時に攻撃の射程圏内にまで詰めた。一歩間違えれば黒こげになっていたかも知れないその賭け。だがカーチはそれをやったのけた。

「はあ……素敵ですう、カーチ様……………」

「いや、確かに凄いけど……なんかあの無茶苦茶な避け方見るとあのバカ思い出すのはどうしてかしら？」

「ジェガン、かげぐち言うのダメ……………」

「アタシのは聞こえるように言ってるから陰口とは言わないの……よ！」

何かを振り払うように、ジェガンは姿勢を低くして、ラピッドキヤストと身体を密着させてLv2通常弾を撃ち込む。機動力を犠牲にする代わりに反動を最大限まで抑え込みことで次射までの時間を短縮する方法だ。

それを鬱陶しいと思ったフルフルは首を伸ばして、噛み付こうとする。だがその攻撃は届かず、ラピッドキヤストに取り付けられた簡易シールドによって遮られた。

（……ッ、思ってたより飛ばされるわね。そう言えばスコールに武器自体の破損もおきやすいからどうしても避けられない攻撃以外は受けるなって言われたっけ……）

防御の反動から立ち直り、追撃の電撃ブレスのモーションを確認すると同時に横へ飛び退く。以前戦ったフルフル亜種戦との経験が活きてるのか、不思議と考えるよりも速く身体が動いてくれる。勿論、行動全てが同じというワケではないが、それでもあの戦いで得た経験は決して無駄ではなかったと悟って　少し恥ずかしいことかもしれないと思わず首をブンブンと振る。

「……？　ジェガンさん、どうしたんですか？」

「な、何でもないわよっ！」

「顔、赤いですよ？　もしかして無理を押してるんじゃない？」

「あんまりしつこいと鞭打つ代わりに散弾ぶっ放して馬車馬みたいに駆り出すわよ！」

「す、すみませんっ！」

「……………」

「むう……………」

狩りの最中であるにも関わらず、どこかのほほんとしたラブコメを展開するジエガンとカーチ。そしてそんな二人を見つめる二人の少女。

「カーチ様……本当は年上が好きなんですか？」

「大丈夫。男はみんなかわいい娘が好きだって、スコール言ってる……………」

「わ、私がカーチ様の……………！？」

男は可愛い娘が好き　カーチは可愛い娘が好き　つまり自分はカーチ好み！

そんな恋する乙女の方程式がリンの頭の中で一瞬で組み上がり、だらしなく頬を緩める。

だがそんな空気を吹き飛ばすような出来事が、直後に起きた。

『……………ッ！！』

「ッ！」

突然、洞窟内に響くバインドボイス。それは反響を繰り返し、通常よりもより強力なモノとなって四人の行動を封じる。

その咆吼は反撃の狼煙があがった証。それまで地に足をつけて賣っていたフルフルがついに本気を出した。息を荒げ、身体の発電能力をフル稼働させて獲物を仕留めるモンスターとして。

このバインドボイスを以て、余興は終了した。本当の狩りは、これから始まる……………。

## 黒は猛者と踊り、白は戯れる（後書き）

今回の話は以上です。

次回からは師匠たちが、フルフルが猛烈な追い上げを見せます。フルフルは本当にトラウマです。なんというか、基本ごり押したくない私にとって一撃が重いつか速いとか本当嫌で……あれ？ だったらモンハンに出てくる敵全部相性悪いジャン！

……ちゃんとG級まで行けるか心配になってきた……

でわでわ。

決着、そして……（前書き）

一週間遅れで投稿となってしまうって本当に申し訳ありません。 m（  
――） m

短期間でしたが今回の合作は次回で最終回となります。それが終われば……多分銀レウスに集中するかと。（え？）



決着、そして……

唐突だが、ハンターに求められるモノは何か？

人によつて答えは千差万別だが、共通して言えるのは協調性である。俺のような特別なケースは別にして、大抵のハンターというのは決まった人間、もしくは臨時で募集したハンターと組んで討伐に当たるケースが多い。

故にドンドルマで活動するハンターならば、最低限のチームプレイの基礎は教養として知っておかなければならない。そして俺たち二人に置ける連携と言えば一つしかない。

ランハの攻撃力と機動力を殺さず、且つ圧倒的な火力で攻め続ける

(……ッ。流石に太刀は攻撃範囲が広いな……！)

ランハの邪魔にならないよう、立ち位置に細心の注意を払いながらブリュンヒルデを振るう。邪魔にならないように……と言っても向こうもそれは承知してるのか、太刀が届くギリギリの距離から斬撃を入れている。今や黒グラの周りには太刀の閃光と火花が舞い散り、少しずつだが確実に耐熱性の高い装甲を剥ぎ取っていく。

「  
」

「黙ってる！」

バインドボイスが来るよりも早く、顎をかち割るようにアップパーカットの軌道で斬り上げ攻撃をぶちかまして強引に口を閉ざす。高級耳栓なんて洒落たスキルのない俺にとってはバインドボイス一つとっても致命傷に繋がってもおかしくないからだ。

だが黒グラもいいようにやられている訳じゃない。身体に蓄積したダメージを無視して、より強いダメージを与える為に強引に羽ばたいてボディープレスを仕掛けてくる。俺はすぐに範囲の外へ逃れたが、ランハの姿が見当たらない。

まさあ、アイツ……ッ！

「おいおい、マジかよ……」

上空へ羽ばたく黒グラを見上げたとき、俺はみた。奴は羽ばたくのを見越して、背中に飛び移るや否や、すかさず気刃斬りを双剣の乱舞顔負けの速さで叩き込んでいた。

素人目からすればそれはデタラメに振り回しているように見えるかも知れない。だが実際には奴の太刀は正確無比に鱗の縫い目を、或いは殻の隙間を狙い、中までダメージを浸透させている。

（こりゃ本物の太刀使いだな。蒼穹の二つ名は伊達じゃないってとこか）

大抵、太刀を使うハンターってのは連携が苦手なだけでなく、武器の性能を十分に活かしてないケースが多いが、ランハは太刀の性能を熟知した上で、あれだけ華麗にして苛烈な攻撃を見せつけた。黒グラが地上へ降り立った頃には数本の血飛沫が舞い上がり、ダメージの深さを物語っている。

……あれ？ このままじゃ俺何もしないお荷物じゃね？

（そろそろ存在感出しとかなないとヤバイな）

何がどうヤバイのか自分でも分からないが、このままじゃ良くない気がする。そして俺を完全に見下した黒グラは溜めモーションに入る。あれは……熱線か！

「させるかよッ！」

流石に限界まで強化したG級装備でも黒グラの熱線をモロに直撃して耐えられる道理はない。普通ならば回避するのが、それはあくまで教科書通りの狩猟をする場合。この距離ならば多少の無理をしても充分お釣りがくる。

ランハが熱線に向かって突撃する俺を見て何かを叫ぼうとしているがもう遅い。黒グラの体温が一気に上昇して、口に熱源が集まる一秒後には世界を赤く染め上げる熱線が俺の世界を染め上げる。

……と、普通のハンターならば考えるだろう。

「おおおおおっ！」

熱線が吐き出されるかどうかのほんの一瞬の差だった。赤熱した

口内目掛けて全身の力を込めた一撃を叩き込む。直後、口の中で爆発が起こり、俺の身体は空中へ投げ出されるも、その場で器用に身体を捻って着地を決める。

「人のことを言えた義理じゃないが、心臓に悪い攻め方だな」

「うっせ。お前よりはマシだとは思っけがな」

皮肉をたたき合いながら、再度黒グラへ駆ける俺たち。ここが正念場だと肌で感じたのだろう、普通なら撤退する筈の黒グラは、敢えて俺たちの強襲を受けた。

それは飛竜としてのプライドなのか、或いは別の思惑があつてのことか。いずれにしろ、黒グラとの決着は近づいていた……。

リミッターを外したフルフルが最初に取った行動は帯電状態での突進。通常の突進力に加えて、高圧電流を纏ったその一撃は即死級の威力を纏い、油断したハンターを容赦なく死に追いやる必殺の一撃。距離を取って戦うガンナーにとってはさほど問題ではないが、接近戦を強いられるカーチにはまさに死をリアルに感じさせる攻撃だ。

だがそれでも

「ボサつとすんじゃないわよ！ 怒り状態と言っても動きはクック以下なんだから！ しっかりフルフルだけ見てればどうってことないわッ！」

ジェガンの叱咤激励に突き動かされるように、カーチの攻めは相変わらず激しく、しかし慎重さは忘れずに着実にフルフルへダメージを蓄積していく。

そして三人のガンナーによる執拗な遠距離攻撃。

知つての通り、このパーティー編成は防御面から見れば大きな不安がある。片手剣は最前線で戦うというよりは前衛と後衛の中間的なポジションであることが多い。万能型ではあるが、ハンマーのような重い一撃も、ガンランスのような派手さもない。あらゆる局面に対応できるが究極には成り得ない武器。しかもカーチは初心者だ。

フルフルがその気になればいくらでもガンナーとの距離を詰めることが出来る。

だがここで一つ勘違いしてはいけない。フルフルが優れているのはあくまで攻撃力と打撃に強いこと。他の性能に関して言えば決して高いとは言い難い。ましてやガンナーは常に距離を取って攻撃をしているのだ。フルフルが持つ鈍足という欠点と、年長者でもあり唯一の飛竜戦を経験したジェガンの存在が相まって三人の心に安心感を与えていた。それにより、初見の相手であっても普段通り冷静に対処することが出来た。

（そろそろ頃合いね……）

弾丸を再装填しながらジェガンは一つの決断をする。怒り状態のフルフル相手に三人はよく善戦している。だがそれでも肉体的な疲労は決して無視できるものではない。今は緊張の糸が切れてないから無理が通じるが、その糸が切れて無茶な行動を起こせば

普段の彼女ならばそんなことなどお構いなしとばかりに果敢に攻め続けるだろう。だがそれは一人で戦う場合だ。今回はリーシャだけじゃない、カーチとリンの命も預かっている立場だ。無理が無茶になる前に一区切り付けるべきだと判断した。

「一旦引くわよッ！」

「えっ？　ですがジェガンさん　」

「四の五の言う前に撤退準備！」

フルフルの嗅覚を一時的に混乱させる為に充填したペイント弾を一斉掃射して、リーシャはカーチの手首を掴んでグイグイと引っ張り、リンはそんな二人を見て嫉妬すればいいのか羨めばいいのか分からない微妙な顔のまま、ジェガンに釣られるようエリア外へ逃げた。

「あいつは私たちの猛攻でそれなりに手傷を負っている。だけど疲弊しているのはこっちも同じよ」

一つ隣のエリアの朽木に腰掛け、何処までも冷静な声でジェガン

は言った。常に最前線で動き回っていたカーチは肩で息をしており、ガンナー三人の手持ちの弾丸も三分の一を切っている。

「だからこそ、私たちはあいつを倒す為に万全の準備を整える必要があるわ。それも確実に大ダメージを与える為に……」

「寝込みを襲うってことですか？」

「ええ。でも寝込みを爆弾で襲ったところで討伐には程遠いでしょうから、ここまですつと温存しておいたシビレ罠を使うわ」

「その隙に捕獲用麻酔弾を撃ち込むんですね？」

「……？ どういう、こと？」

三人の間で話が纏まったところで、ただ一人だけ話に付いてこれていないリーシャが口を挟んできた。彼女にしてみれば凶暴なモンスターを捕獲すると言われても少しもイメージが沸かないから当然の反応と言えば当然かも知れない。

「端的に言つとね、今回は捕獲つて言う、ハンターならば絶対にやつちやいけない簡単で安易な手段で言うなれば自分の力を全く信じてない臆病者が使う方法を取るのよ」

「いえ、ジェガンさん。捕獲も立派な戦術だと思うのですが」

「私の辞書に捕獲はない。あるのは射殺と討伐の文字だけよ」

どっちも同じなのでは　と突っ込みを入れる人は誰もいなかった。

「五分休んだらすぐ行くわよ。きっとその頃には寝床で体力の回復に勤めてる筈だから」

二人のG級ハンターに深い傷を負わせられた黒グラは逃げていた。恥も外聞もない、惨めな敗走に彼の怒りは爆発寸前の状態だ。

それはあつてはならないことだ。例え相手がどれだけの力を付けたとしても、所詮は脆弱な存在である生物に遅れを取るなど……ッ！　例えそれが驕った思想であろうとも、それだけが彼を支える唯一の柱だった。そしてその柱が今、折られようとしている。

……ふと、そこで黒グラは偶然見つけた。フルフルと最後の決戦

を繰り広げている人間の姿を。

普段の彼ならば構うなんてことはせず、その場を素通りしただろう。だが今の黒グラは腹の中で煮えたぎる怒りの吐け口にはもってこいの相手だという程度の認識しかなかった

フルフルが眠っているのを確認したジエガンたちは、まずはモーニングコール代わりの爆弾をセットすることにした。シビレ罠を最初に使わないのは少しでも高いダメージを与える為だ。シビレ罠は予め設定した進行ルートにセットして、確実に捉える為に使用するそれがジエガンが考えた作戦だ。

爆弾をセットし終えたのを確認してから、リンが弾丸の代わりにペイント弾でタル爆弾を狙撃する。安全装置を外した爆弾は僅かな衝撃でも爆発を起こす為、取り扱いには最新の注意が必要なのだ。

「今よ！ ガンガン撃つて！」

煙が止むよりも早く、ジエガンの号令で残りの弾丸全てを吐き出すように一斉掃射をする。あの程度の爆発でフルフルが死んだとは誰も思っていない。何よりこうすることでフルフルは確実に注意をこちらへ向ける。そうすることで罠への注意を逸らすのが目的だ。

果たしてジエガンの狙いは正しく、猛攻の源であるリーシャたちへ向かい、フルフルが我が身を省みず突撃してくる。

「ッ！？」

が、その突撃は地面に仕掛けられたシビレ罠により、呆気なく阻まれた。そのまま捕獲用麻酔弾を撃てば無事にクエスト終了 誰もがそう思ったその刹那、悪夢は舞い降りた。

「……………」

「な……嘘でしょっ？！」

突然、横から乱入するように割り込んできた黒い塊。フルフルなどには一瞥もせず、真っ直ぐ自分たちへと向かっていく。咄嗟のことに誰もが反応できず、そのまま引かれるかと思っただが、一つだけ幸運なことがあった。進行上にフルフルが居たお陰で、突然の乱

入者の進撃を僅かに拒むことができた。その僅かな時間が、四人に生存という千載一遇のチャンスを掴むことができた。

「ジエガン……あれ……………」

「バサルモス　いいえ、違うわね。それにしたってデカいし黒いし……もしかしてグラビモスの亜種？　冗談にしたって笑えないわね」

もたついている間にどうにか離脱できた四人。だが状況は限りなく絶望に近いと言える。至るところに手傷を負っているとは言え、ジエガンたちからすれば未知の存在。事前情報などなく、攻撃方法も攻略の仕方もまるで分からない。いや、仮に分かっていたとしても手持ちの弾丸で戦えるようなモンスターなどではないことは何となく理解してる。

再度、黒グラは腹に力を溜める構えを取る。少し事情通のハンターがそれを見れば熱線の予備動作であることはすぐに悟ることができるが、彼女たちは対応を誤った。

訳も分らず中途半端に横へ跳んだその刹那、世界を赤色に染め上げ、大地を焦土に変える灼熱が吐き出された。直撃こそ免れたものの、一番近くに居たジエガンは熱風で吹き飛ばされただけでなく皮膚を火傷し、比較的遠くにいたリーシャは余波で川へ落とされ、カーチはリンを庇ったせいで熱線を僅かに掠め、装備の一部が解け落ちて背中に深い火傷を負うハメとなった。

「カーチ様、カーチ様……っ！」

必死に彼の名前を呼んでみるも、火傷による痛みと頭を打った衝撃で意識が混濁している。ジエガンは必死に逃げるよう声を出そうとするが、地面に叩き付けられた影響で肺の中に堪った空気を強制的に吐き出され、苦しそうに咽せる。

「……ッ！」

己が絶対の自信を持つ必殺技の威力を誇示するかのように、バインドボイスで大気を震わせる。それはまるでやはり自分こそが勝者であるべき存在だと言わんばかりの、力の誇示。

（っさい声で、鳴いてんじやないわよ……ッ！）

もはや装備などに構っている余裕はなかった。ヘヴィボウガンを手放して立ち上がり、走りながら防具を投げ捨てる。あんな化け物相手にこんな防具など意味もない。少しでも身体を軽くして駆けつけなければ意味がない。

（リーシャは川に落ちたから大丈夫だと信じる！　今はあの二人を助ける……ッ！）

年長者としての責任か、或いはハンターとしてのプライドか、どちらにしろここにきてジェガンは爆発的な力を発揮して、最速で二人の元へ駆け寄ると泣きすがっているリンを退かしてカーチを担ぎ上げた。身体が悲鳴を上げているが、人間が本来持つ火事場の馬鹿力が肉体の制限を外してくれたお陰で、ジェガンでもカーチを持ち上げることができた。

「泣いてる暇なんてないわよ、バカ！　死んだら元も子もないわよ！」

空いた手でリンの背中を叩く。それで正気に戻ったリンはぐしゃぐしゃな顔のまま、走り出す。だがそれも儚い抵抗でしかない。既に必殺の圏内にいる三人の逃走劇など、次の瞬間には終わるのだから。

そう

「うちの可愛い弟子に何してんだテメエッ！」

悪鬼羅刹の如きオーラを全身から発したスコールによる、破壊の一撃と

「蒼天流壱ノ型【一閃】」

絶対零度の冷気を纏ったランハの無慈悲な死の一閃が進れば彼女たちの逃亡劇など、その瞬間に幕を閉じるのだから

嫌な予感 は狩猟前からあった。リーシャたちが狩りをする狩り場と隣接していると聞いた時点でこうなるんじゃないかとは薄々勘付いてはいた。けど実際にそういう事態になると自分でも思ってた以上



に冷静でいられないってのが現実。

「……つまり、アンタがやらかしたせいで私たちはとばっちりを受けたワケ？」

「あー、うん……。端的に言えばそうなる、のかな？」

「アンタそれでもG級ハンター？」

耳が痛いですよジェガンさん。そりゃこっちに落ち度があったのは認めるさ。

認めるけどさ……もうちょっとねぎらつてもいいんじゃない？

俺の翔龍剣で黒グラの腹の肉殆ど吹っ飛ばしたんだよ？　ランハに至っては一瞬で首落としたんだぜ？　俺たち超頑張ったよな？

……ジェガンの前じゃ少しもフォローできないけど。

「それよりジェガン、お前防具はどうした？」

「走るのに邪魔だったから捨てた。あんな化け物相手に防具持つていても意味ないし」

「そりゃまた斬新な方法だな」

皮肉を込めてそう言いながら、ちらりとランハの弟子（本人は違うと言ってるが多分照れ隠しだろう）ことカーチの様子を見ている。カーチは今、救護アイルーに話を付けて報酬額の三分の一を支払って治療を受けている。クエスト達成後に救護アイルーを呼ぶことになるとはな……。

リンは……俺が来る前はかなり取り乱していたらしいが黒グラを殺った頃にはだいぶ落ち着きを取り戻していた。

んで、俺の一番弟子のリーシャは

「くしゅんっ」

「大丈夫か？」

「ん……寒い……」

予備の着替えもインナーもないリーシャはインナー姿のまま、焚き火に当たって身体を暖めている。当然、俺は紳士なのでリーシャの正面には絶対立たない。濡れてるってことは……分かるな？

「初のパーティーリーダーを勤めた感想はどうだ？」

普段はリーシャとのコンビ、もしくは俺とリーシャのパーティーで狩りをすることが多いジェガンにとって、今回は初めてのパーティープレイと言える。なんだかんだ言いつつもこいつ、面倒見はいから少数パーティーのリーダーを勤められるぐらいの才覚はあると俺は評価してる。だから今回はジェガンに一任してみたんだが

「メンドウなのはもう懲り懲りよ。やっぱり私は自由に撃ちまくってる方が性に合ってるわ」

「それはそれで問題があるが……まあ楽しめたんなら次の機会にも頼もつかな」

「冗談じゃないわよ。これっきりにして頂戴」

とか何とか言いつつ、何処かまんざらでもない様子で答える。何だかんだ言いながらも頼られて悪い気はしないって感じだな。

とにかくこれで依頼は終了した。後はドンドルマへ帰るだけだ。

決着、そして……（後書き）

この合作を書いていて一番面白かったのは実はジェガンだったりします。スコールとランハを書いているときよりも弟子たちを書いてるときが一番楽しい……不思議！

多分、銀レウスでジェガンの活躍劇があまりに少ないから余計にそう感じたんでしょうね。  
でわでわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6977t/>

---

銀レウス番外編 あるハンターとの狩猟記録

2011年10月10日03時10分発行